研究主題　「弱視児童・生徒の自立活動に関する指導内容・方法の研究」
―目と手の協応性を高める指導の在り方―

Ⅰ　団体の概要

東京都弱視教育研究会は、都内の都立盲学校４校、筑波大学附属視覚特別支援学校、都内弱視通級指導学級 12 校（小学校９校、中学校３校 ※１校休級中）により構成され、弱視児童・生徒が視覚障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服する力を身に付けられるよう効果的な指導内容・方法について主題を設定して研究活動を行っています。

Ⅱ　授業研究

本研究会では年２回授業研究を行い、研究主題に迫るための協議を重ねています。今年度は、目と手の協応性を高める指導の在り方について、研究を進めています。

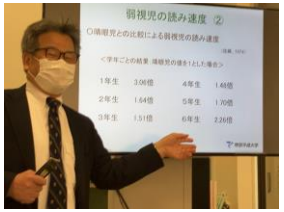
指導講師：筑波大学人間系（障害科学域）准教授　佐島　毅 様

第１回　令和５年７月３日(月)　足立区立足立小学校
授業者　主任教諭　澁谷　律子、教諭　毛利　涼夏
題材名：「作品展に飾る『なかよし村』をつくろう」
目標　・手指のトレーニングを通して、力の入れ方や両手を協応させる動きを習得する。
・学習道具であるハサミを使い、作りたいものを正確に作る能力を高める。

第２回　令和５年 11 月６日(月)　練馬区立中村西小学校
授業者　主任教諭　照屋　容子、教諭　中谷　瑠璃
題材名：「魚をたくさん泳がせよう」
目標　・針と糸を使った布小物の製作に関心を持ち、意欲的に取り組む。
・ボタンの特徴や付け方を理解し、安全にボタン付けができる。

Ⅲ　講演会

○記念講演
令和５年４月 24 日(月)
演題：「弱視教育の基礎・基本」
講師：帝京平成大学　人文社会学部　教授　田中　良広 様
内容：・弱視児童・生徒の視覚認知特性
・改めて問い直す「弱視レンズ訓練」
・インクルーシブ教育システムの充実に向けた学習評価の在り方
・合理的配慮について



○見学会（講演会）
令和５年８月７日(月)
演題：「視覚障碍者の就労支援の取り組み」
講師：日本視覚障碍者職能開発センター
常務理事　杉江　勝憲 様
内容：・視覚障碍者の職域、職種
・視覚障碍者の就労を取り巻く課題
・事務系職業訓練について

○講演会
令和５年 12 月７日(木)
演題：「目と手の協応を高めるための発達的視点と指導の在り方」
講師：鳥取大学地域学部地域学科　講師　渡邉　正人 様
内容：Ⅰ　姿勢・運動、認知の発達
Ⅱ　目と手の協応を高めるための発達的視点
Ⅲ　弱視児への目と手の協応を高めるための指導
Ⅳ　指導法の検討
１）　基本的な環境整備と姿勢の確認
２）　弱視児に応じた主な教材の選定と指導方法
３）　学習・活動での評価の観点
４）　事例検討

Ⅳ　研修会・研究発表

◇第１回　専門性向上研修
令和５年５月８日(月)
演題：「通常学級での理解啓発授業」
講師：世田谷区立笹原小学校　主任教諭　豊田 裕美
　　主任教諭　北川 由美
内容：通常学級の児童に対し、弱視児童の見え方やどんな時に困るのか、それを補うための補助具、弱視児童に対してどんなことができるかなどの啓発授業について学びました。

◇第２、３回　専門性向上研修
令和５年８月７日(月)
演題：「視覚補助具の指導について」
講師：世田谷区立笹原小学校　主任教諭　豊田 裕美
内容：様々な視覚補助具を使用して指導する際の留意点などを学びました。

演題：「目と手の協応性を高める指導について」
講師：葛飾区立住吉小学校　　教諭　薮内 公三
内容：色画用紙などを使った工作で、楽しみながら目と手の協応性を高める教材を紹介していただきました。

◇第４回　専門性向上研修
令和５年 10 月２日(月)
内容：各校の事例発表会
「弱視児童・生徒の視覚認知を高める指導について」

◇第 64 回弱視教育研究全国大会（広島大会）
開催期間：令和６年１月 18 日（木）～１月 19 日（金）
研究主題
（１）弱視幼児・児童・生徒の特性を生かした指導の在り方を考える
（２）弱視幼児・児童・生徒に対する専門的指導を通して、特別支援教育における弱視教育を考える
主催：日本弱視教育研究会、広島県立広島中央特別支援学校
後援：文部科学省、広島県教育委員会、全国盲学校長会
広島県特別支援学校長会、中四国地区盲学校長会

Ⅴ　調査研究

◇「目と手の協応性を高める指導」（研究推進担当）
対象：都内盲学校・視覚特別支援学校・都内弱視通級指導学級担任
方法：アンケート調査

各校の目と手の協応性を高めるための指導及び教材の工夫について共有し、今後の指導の指標を立てることを目的としました。

Ⅵ　資料提供

本研究会所属校の事例を共有することで、弱視教育に関する知識・実践経験の蓄積を大切にしています。

◇令和５年５月８日（月）町田市立本町田東小学校
・学級概要
・指導内容の紹介…個別指導、授業内支援、理解啓発授業
◇令和５年 10 月２日（月）江戸川区立第四葛西小学校
・学級概要
・指導内容の紹介…自立活動、学習発表会、三校交流会

＜令和5年度連絡先＞

団体名		東京都弱視教育研究会	
代表者	所属	町田市立本町田東小学校	
	職　氏名	校長　望月　伸悟	
	連絡先	０４２－７２２－８１９３	
事務局	所属	町田市立本町田東小学校	
	職　氏名	教諭　近藤　修安	
	連絡先	０４２－７２２－８１９３	
団体ホームページ		ＵＲＬ	二次元コード
		https://tojyakushi.moo.jp/	

研究主題　難言教育の専門性向上に向けて

団体の概要：東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会は、東京都の公立学校難聴・言語障害通級指導学級の研究会である。都内区市町村の小学校を１１ブロック、中学校を１ブロックとして、ブロックごとに研究を行っている。例年、都難言協全体の研究発表は、該当するブロックが行っているため、今年度は４ブロック（城北ブロック・江北ブロック・江南ブロック・多摩西ブロック）の研究について報告する。

城北ブロック

「非流暢性発話のある児童への指導・支援
～個別指導とグループ指導を通して自己実現を目指す児童の育成～」

Ⅰ　研究の構想

研究主題：非流暢性発話のある児童への指導・支援
～個別指導とグループ指導を通して自己実現を目指す児童の育成～

《目的》　非流暢性発話のある児童への個別指導事例やグループ指導事例の蓄積により有効な指導方法や教材を見出し、研鑽し、実践、検証、共有する。

目　指　す　児　童　像

非流暢性発話と向き合い、自己実現を目指す児童

研　究　仮　説

人との様々な関わりを通して自分自身と向き合うことで非流暢性発話について知る。それにより、自己の状態を理解したり、困ったときにどのように対応していきたいかなどを考えたりすることができる。自分の考えや気持ちをことばや態度に表すための指導を行うことで非流暢性発話と向き合うことができるのではないか。
非流暢性発話を理由に諦めることなく、話したり、伝えてみたり、やってみたりするための指導を行うことで、子供が自己実現しようとする姿勢を育めるのではないか。

研　究　の　視　点

《　個別指導分科会　》
①ことばの非流暢性についての**自己認識**への促進
②**コミュニケーション力**の向上
③**視覚的に分かりやすい**指導方法

《　グループ指導分科会　》
①児童の「今」を捉えた的確な**実態把握**
②安心感を得られる**場の設定**
③仲間と伝え合い深め合う**指導内容**
④個別指導とグループ指導をつなぐ**事前･事後指導**

Ⅱ　研究の方法

指導をする上で、個別指導とグループ指導はどちらも大事であり、相互に関連付けて指導していくことがより効果的ではないかと考えた。そこで、個別指導分科会とグループ指導分科会に分かれ、分科会ごとの視点に沿って事例研究を行い、自己実現を目指す児童の育成を図った。

Ⅲ　研究の成果と今後の展望

「非流暢性発話と向き合い、自己実現を目指す」という児童像が確立し、指導・支援についての方向性がより明確になった。
今後は、個別指導分科会とグループ指導分科会の取り組みをブロック全体に更に広げることで、非流暢性発話の指導･支援をより充実させる必要がある。

江北ブロック

「一人一人の実態に応じた指導の工夫～伝える力を高めるために～」

Ⅰ　研究の目的と方法

文京区、豊島区、練馬区の８校からなる江北ブロックでは、児童の実態把握を丁寧に行い、児童の主たる課題が何かを見立て、目標に対応した指導を実践していくことで指導力を向上させたいと考えた。特に、言語発達に課題のある児童の伝える力を高めることを目指し、上記の研究テーマを設定した。
事例検討を通して、事例児童の言語発達の課題について協議し、各校で課題に応じた教材･活動案を考えた。教材作りや指導の工夫について、「葛西ことばのテーブル」の三好純太先生より指導・助言をいただき、活動案の検討を重ね、活動案集としてまとめた。

Ⅱ　研究の内容

言語の四側面（音韻、意味、統語、語用）を柱として児童の言語の課題を明確にし、伸ばしたい領域に応じた活動案を考えた。実践した児童の様子を報告し合い、より児童の実態に合った指導を行うための活動案となるよう検討した。研究を通して集まった活動案を基に、同様の課題をもつ児童への汎用性をもたせることも考慮しながら協議シートを改訂し、活動案集を作成した。

Ⅲ　研究の成果と課題

言語の四側面の視点から言語発達面の主たる課題を整理することで、児童の実態や課題に沿った活動案を考えることができた。一人一人の児童の実態に応じた活動案に、汎用性をもたせるという視点を取り入れながら改訂を加えることで、活動案集にまとめることができた。
児童の伝える意欲が高まったことは実感できたが、伝える力が高まったかどうかを客観的に評価することは難しかった。一人一人の実態に応じて作成した活動案であるが、個での使用にとどまらず、より広く活用していける工夫を考えていくことが課題である。

江南ブロック

「よりよい教育相談を目指して」

Ⅰ　研究の目的

保護者の相談内容が多岐にわたることに加え、難言教育の経験年数が浅い教員が増えていること、自治体ごとに教育相談のシステムが異なることなどから、教育相談(入級相談)に難しさを感じる教員が多い。教育相談(入級相談)の在り方を考え、よりよい相談につなげることを目的とした。

Ⅱ　研究の内容

「保護者との連携分科会」と「生育歴分科会」に分かれて行った。

・保護者との連携分科会

入級児童の保護者にインテーク時の初回相談についてアンケートを実施した。結果から、在籍学級担任や保護者へ「きこえとことばの教室」について理解啓発をすることや、保護者へのフィードバック方法を検討する必要があることが分かった。教室からの情報発信に加え、情報共有を日頃から行うなど、保護者、在籍学級と連携することの重要性を確認した。

・生育歴分科会

相談時に保護者から聞き取る内容について、その意図を理解するために、子供の発達を「情緒・社会性」、「からだ・感覚」、「言葉」の３つの領域に分け、発達指標を精査した。事例を基にした研究を進める中で、この３つの領域は互いに関連していること、発達を確認するには認知の側面を意識する必要があることが見えてきた。そこで、初回相談時には「言葉」だけに焦点を当てるのではなく、相互の発達の関連を意識して聞き取り、子供全体を捉えるよう意識することが重要であると分かった。

Ⅲ　研究の成果と課題

早稲田大学教職大学院講師の長岡恵理先生に御指導いただき、よりよい教育相談(入級相談)の在り方を見直すきっかけになった。今後の具体的な活用方法については、各学級で検討していきたい。

多摩西ブロック

「読み書きが苦手な児童へのＩＣＴ活用の可能性を探る」

Ⅰ　研究の目的と方法

タブレット端末が一人１台支給されるようになり、難聴・言語障害通級指導学級でも ICT 教材を活用した指導・支援の幅を広げ、充実を図りたいと考えた。講師として永田真吾先生（山梨大学准教授）をお招きし、読み書き指導の基本的な考え方、ICT 教材を通級指導で活用する際のポイント、検討課題などについて学ぶとともに、事例検討及び ICT 教材の整理を行った。

Ⅱ　研究の内容

「多摩西版テクノロジーホイール」（ICT 教材がどのような指導や支援に活用できるかを円形の表にまとめたもの）、「指導教材表」（ICT 教材と従来の教材を対比し、分類した表）、「ICT 活用詳細ページ」（ICT 教材の内容や使い方、留意点についてまとめた冊子）を作成し、その中から、それぞれが見やすいものを目的に応じて使い分けながら教材を探し、実際の指導に活用できるようにまとめた。また、ICT 教材を活用して指導を行った事例の指導経過を記録し、検証を行った。

Ⅲ　研究の成果と課題

「読み・書き・メモ・意味語彙」などの区分のほか、「指導又は支援」という視点で ICT 教材を分けることで、何のために使う教材なのかを整理して把握することができた。しかし、それぞれの ICT 教材の特性や、どんな認知特性がある児童に適しているのかなどを精査しきれなかったことは課題である。今後は、児童の背景情報や認知特性などをしっかりと把握して、ICT 教材のより効果的な活用方法を共有していきたい。

＜令和5年度連絡先＞

団体名		東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会	
代表者	所属	杉並区立高井戸第四小学校	
	職　氏名	校長　本橋　忠旗	
	連絡先	０３－３３３３－７８２８	
事務局	所属	杉並区立高井戸第四小学校	
	職　氏名	主任教諭　吉廣　典子	
	連絡先	０３－５３３６－９５２１	
団体ホームページ		ＵＲＬ	二次元コード
		https://www.tonangen.com	

進路指導の実態調査・研究及び就業体験・学習会等の企画・運営

Ⅰ　団体の概要

東京都内にある都立肢体不自由特別支援学校 18 校及び、筑波大学付属桐が丘特別支援学校・新宿区立新宿養護学校の進路指導担当教員約 30 名で構成し、年間７回の協議会にて、進路指導上の課題検討や情報交換を行っている。また、就業体験や学習会の企画・運営、進路指導とキャリア教育に関する調査・統計を行い、関係諸機関との連携を図っている。

Ⅱ　研究の目的

・進路指導に関する課題の解決や情報共有・共通理解を図る。
・就業体験等を企画し、進路先開拓とキャリア教育推進に資する。
・諸調査の成果を活用し、関係諸機関と共に進路指導を推進する。

Ⅲ　研究の内容

1　各校進路指導の取組みに関する情報交換
・会場及びリモートによるハイブリッド開催
・肢体不自由のある児童・生徒への進路指導に関する専門性の共有
2　各種調査
・地域別在籍者数、卒業生進路実態、各校作業学習の実際、各校進路指導における外部機関活用実態
・多様な学び方や働き方に関する調査・研究
3　就業体験
・企業のＣＳＲ活動を活用した共同企画
4　在宅就労に関する調査・研究

Ⅳ　実践事例

１　就業体験「キャリア・メンタリング・プログラム」

ゴールドマン・サックス証券株式会社の協力の下、高等部生徒のキャリア教育の機会として就業体験を実施した。

当日は 10 校から高等部生徒 14 人が参加し、主催「公益社団法人ジュニアアチーブメント日本」進行の下、参加者とのアイスブレイクや会社見学、キャリア・メンタリングに取り組み、他者理解やコミュニケーションの実践、自己理解を深めた。

２ 就業体験「日本マイクロソフト株式会社オンライン職場見学会」

日本マイクロソフト株式会社及び日本ヒューレット・パッカード合同会社の協力の下、中学部生徒のキャリア教育の機会としてオンラインでの職場見学会を実施した。

当日は 15 校から生徒約 60 人が参加し、会社様の進行の下、見学やグループワークに取り組み、働く人々との交流や企業の取組などを体験した。

３ 在宅就労に関する調査・研究「学習会①」

在宅就労の先進事例として沖ワークウェルから講師を招き、法人の事業や株式会社沖ワークウェルが開発した「ワークウェルコミュニケータ」を活用した「バーチャルオフィスシステム」のデモンストレーションをとおして在宅就労の実際について学んだ。

講師から、在宅就労の検討や就労後のＱＯＬ向上へ向け、在学中から福祉サービスを導入しておくことの重要性について助言を受けた。

4 在宅就労に関する調査・研究「学習会②」

令和３年４月に在宅型雇用を開始した、株式会社リクルートスタッフィングクラフツから講師を招き、在宅事業や特別支援学校向け「オンラインしごと体験会」について学んだ。

在宅型雇用開始から３年目となる現在、勤務場所や勤務時間、雇用期間等について、在宅勤務社員のニーズを聞き取り、実情を踏まえた就業条件の変更および検討を進めている企業努力等の報告を受けた。

5 在宅就労に関する調査・研究「学習会③」

本協議会では、「在宅就労作業部会」「『進路の手引き』部会」の２つの部会を置き、若手教員育成へ向けた研修機会拡充や進路指導における参考資料の編集を実施している。今年度も「東京都障害者 IT 地域支援センター」への施設見学や『進路の手引き』の検討を行った。

『進路の手引き』は、若手教員育成のために、平成 31 年度から検討を開始し、毎年度、文言の精査や内容の見直しなどを重ね、より最新の情報に即した内容となるよう改訂している。

「進路の手引き」

令和５年８月２２日改訂

はじめに	p.1
進路指導とは～キャリア教育の観点に基づいて～	p.2
豊かな人生を支える 11 の観点	p.2
「いつでも・どこでも・だれとでも」が紡ぐ豊かな生活の実現	p.2
在学中の「３つの MUST」	p.3
社会生活と進路指導をとおして身につけていきたいカ	p.3
自立の考え方・捉え方	p.4
医療機関との連携	p.4
百聞は一見に如かず！見学・相談のススメ	p.4
障害児・障害者にかかわる法制度の理解	p.5
御家庭と学校との連携	p.6
生きる力を育む！小学部の進路指導	p.7
自己を知り、選択する力を育む!中学部の進路指導	p.8
中学部からの進学指導！国公立・私立高等学校の受験について	p.9
これからの人生を考える！高等部の進路指導	p.10
高等部の進路選択　進路ニーズによって十人十色！	p.11
通所するだけじゃない生活スタイル！「障害学習」の取り組み	p.11
障害者通所施設の事業体系について	p.12
障害支援区分とは	p.13
医療的ケアの対応が必要な生徒の進路先について	p.13
進路選択・決定には必須！通所施設・企業等での進路見学・実習について	p.14
高等部３年次 進路決定の手続きについて（障害者通所施設利用の場合）	p.15
愛の手帳の成人更新について	p.16
目指せ就労！企業・公務員等の進路希望について	p.17
目指せキャリアアップ！大学・専門学校、障害者職業能力開発校等への進学について	p.18
就労・訓練校	p.18
進学	p.19
地域で活動している組織など	p.20
農園に	p.20
就労先の選択について	p.21
就労を目指す際の受験構造について	p.21
職業能力開発校等の選択肢について	p.22
別紙① 進路指導を担う先生方へ　12 年間で「進路の土台」を築こう！	p.26

<はじめに>

本手引きは、進路指導について様々な考え方・捉え方の基本から最新の進路情報を集約していますので、進路学習や進路を考える際のツールにしていただければ幸いです。各区市町村で発行している「障害者のしおり・てびき」なども併せてご覧いただくと、より分かりやすくなるかと思います。

また、児童・生徒や保護者からの進路にかかわる御質問については、まずは担任に御相談ください。知りたいことや心配なこと等について、担任としっかりと相談しましょう。

（進路指導部一同）

東京都肢体不自由特別支援学校
進路指導連絡協議会編集
『進路の手引き』目次

Ⅴ　研究の成果と課題

研究成果は、次の４点である。

①「情報交換」では、事務局が各校の進路指導上の課題を事前集約・整理して会議運営することで、有意義な情報交換や検討を深めることができた。

②「各種調査」の活用では、進路指導担当者が学区域内だけでなく、隣接する区市町村や周辺地域の状況についても把握し、進路指導にあたることができた。

③「就業体験」は、６つのプログラムを企業と連携し実施した。５年ぶりに参集型で実施したプログラムもあり、生徒や引率教員からは、実際に顔を合わせ交流や学習ができる喜びや有意義さが確認できた。反面、遠隔地の学校からはリモート型でなければ参加が難しい場合があるとの意見が出され、目的や内容と共に開催形式についても検討していく必要性がある。

④「在宅就労」では、学習会のほか、就労体験を通じた事例研究も進み情報の蓄積が進んだ。

今後の課題は、専門性の向上、調査の更なる活用、在宅就労の実現や希望進路実現へ向けての関係機関との連携、若手育成などである。

＜連絡先＞

団体名		東京都肢体不自由特別支援学校進路指導連絡協議会
代表者	所属	東京都立鹿本学園
	職　氏名	校長　高橋　馨
	連絡先	03－3653－7355
事務局	所属	東京都立鹿本学園
	職　氏名	主任教諭　齋藤　信子
	連絡先	03－3653－7355

研究主題　【小集団指導における自立活動について考える】
～特別支援教室や自閉症・情緒障害学級で何をすべきか～

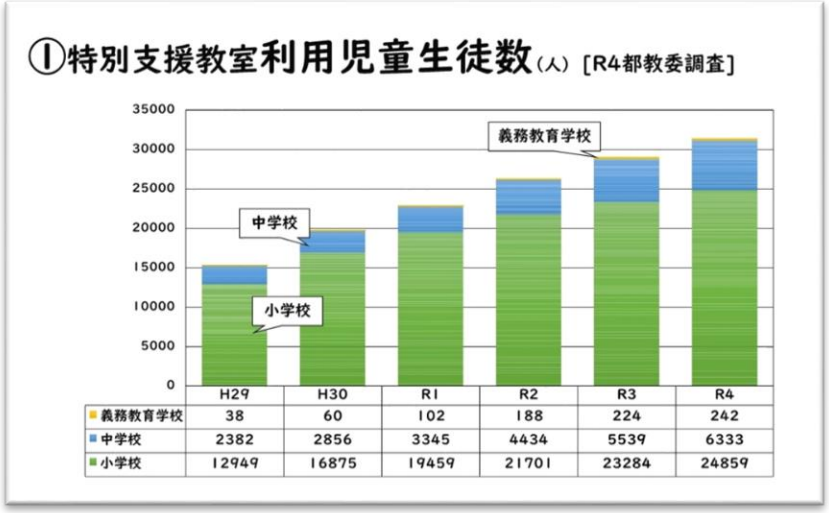
Ⅰ　団体の概要

本会（略称：都情研）は東京都の特別支援教育の充実・発展に寄与することを目的とし、情緒障害教育、発達障害教育等に関する専門研修を通して、教職員の専門性向上を目指している。研修会は全都の公立幼・小・中学校教職員、区市町村教育委員会職員等が対象となる。具体的な研修会として、全都を５ブロックに分けて開催する地区ブロック研修(年間７回)と、全都を対象に開催する全体研修（年間４回）を設定している。また、情緒障害等通級指導学級時代から継続的に実態調査を実施し、それらを踏まえた上での実践的な研修となるよう努めている。

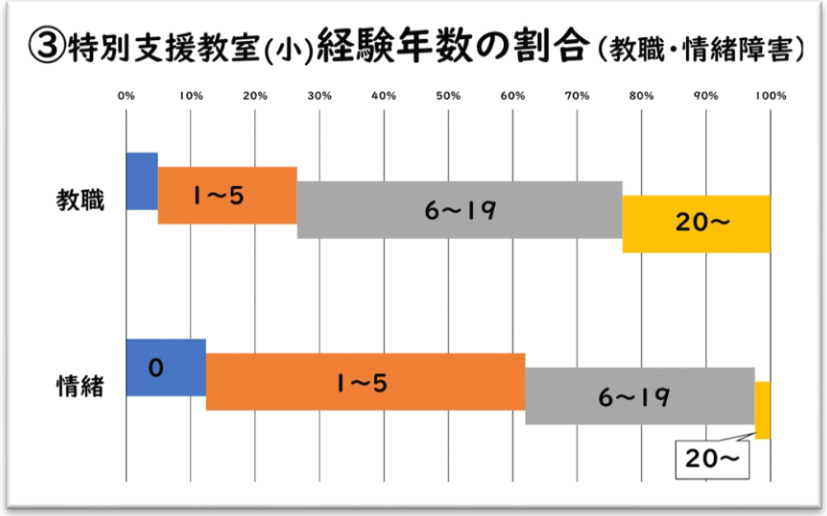
Ⅱ　現状と課題

都内小・中学校全校に特別支援教室が設置され、利用者数が年々増加し、小学校約２万４千人、中学校約６千人、計約３万人となり、それに伴う教員数の増加（約３千人）も著しい。情緒障害教育経験年数５年以下の教員が全体の約７割を占め、効果的な指導がおこなわれるためには担当教員の専門性の向上は必須である。また、全都において、自閉症・情緒障害学級が新たに設置される地域も増え、在籍する児童数も増加傾向にある。特別支援教室、自閉症・情緒障害学級のいずれにおいても、自立活動の指導を行うことが定められているが、経験が浅い故に、具体的にどのような指導を行えば良いのかがわからず困っているという声も多く聞かれている実態がある。これらの課題を踏まえ、各研修会の内容を設定し１年間活動を進めた。

★令和５年度　実態調査より抜粋

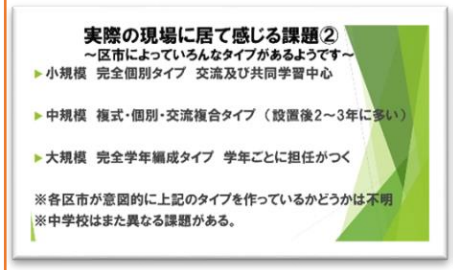


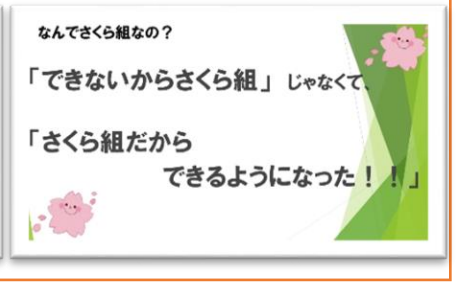
	H29	H30	R1	R2	R3	R4
義務教育学校	38	60	102	188	224	242
中学校	2382	2856	3345	4434	5539	6333
小学校	12949	16875	19459	21701	23284	24859



Ⅲ　夏季研究大会・課題研修会【8月3日（木）・8月22日（火）開催】

夏季研究大会では特別支援教室、自閉症・情緒障害学級の担当者が各校での自立活動に関する実践を発表し、その後パネルディスカッションを実施した。会場の参加者からも多くの質問があり活発なやりとりが行われた。課題研修会では、普段研修会に参加しづらい、自閉症・情緒障害学級と中学校特別支援教室分科会を設定し、実践発表及びグループ討議を行った。他地域、他校の実態や、具体的な教材も含めた実践の交流が行われ、ニーズの高さを改めて認識することができた。（以下は青梅市立第二小の発表より抜粋）





Ⅳ　秋季セミナー【１１月２１日（火）開催】

文科省より加藤宏昭特別支援教育調査官をお招きし「インクルーシブ教育の今後と都情研の役割」と題し、ご講演いただき、その後、本会会長、総務との鼎（てい）談を実施した。国レベルでの、中・長期的な視点で見た特別支援教育の在り方と、東京都の施策、そして今、目の前で我々が取り組んでいる子どもたちへの指導との関係を整理する貴重な機会となった。その上で、時代が変化しても、我々が大切にしなければならないこと等を考えさせられる、多くの示唆に富んだ有意義な会となった。

Ⅴ　次年度への課題

今年度も、1 年間の研修会への参加者が、のべ 5500 人を超えている現状があり、課題に対するニーズの大きさと本会への期待、役割を改めて実感している。今後も実践的な研修を取り入れつつ、全都の情緒障害教育のレベルアップに取り組んでいく必要がある。

＜令和5年度連絡先＞

団体名		東京都公立学校情緒障害教育研究会	
代表者	所属	墨田区立業平小学校	
	職　氏名	校長　伊藤　康次	
	連絡先	０３－３６２５－０３３１	
事務局	所属	立川市立第八小学校	
	職　氏名	指導教諭　上山　雅久	
	連絡先	０４２－５３６－００３１	
団体ホームページ		ＵＲＬ	二次元コード
		https://www.tojyoken.com	

研究主題　「知的障害のある卒業生のより良い働き方と生活について考える」

Ⅰ　団体の概要

平成 11・12 年度に文部科学省から東京都に「盲・ろう・養護学校就業促進に関する調査研究」の依頼があり、事務局を都立青鳥養護学校(現都立青鳥特別支援学校)に置き、調査研究を行った経緯から、主に知的障害のある生徒の就業促進や定着支援等について都内 28 校の高等部設置校進路指導担当教員が調査・研究を行っています。

Ⅱ　研究目的

・知的障害特別支援学校高等部卒業生の進路先と定着状況を把握し、より良い進路指導を実践する。

・知的障害特別支援学校高等部在籍生徒や卒業生のより良い働き方と生活について学ぶ。

Ⅲ　研究方法

・月１回程度の事務局会を行い、年間や次年度の研究内容を検討し、実施する。

・研修会(年間3回)や教職員研修センターとの連携研修(年間2回)を行い、先駆的事例や実践内容を知り、各校の進路指導に活かす。

Ⅳ　研究内容

・知的障害特別支援学校高等部卒業生の進路先と1年後と3年後の定着状況調査を行う。(毎年実施)

・研修会(年間3回)、教職員研修センターとの連携研修(年間2回)を実施する。

Ⅴ　研究の成果と課題

・進路先調査では、高等部を設置する都立知的障害特別支援学校全 28 校からのアンケートを分析し、令和4年度高等部卒業生の 45.2%が企業就職し、令和3年度卒業生が1年経って 92%が働き続けていることが分かりました。また、平成 31 年度卒業生の3年後の調査を行うと、802 人の就職者のうち、89 人が退職していました。3年後の企業定着率は 88.9%でした。

・研修会では、東京労働局や就業・生活支援センターのセンター長、障害者雇用を行っている企業や企業に勤める障害当事者を招き、障害者の雇用状況や制度改正について、特別支援学校高等部卒業後の進路や定着支援の在り方などについて学びました。

・連携研修では、大学教授や働く障害者の生活を支えている支援の方、一人暮らしをしながら働いている障害当事者を招き、キャリア教育や就労・生活支援の状況などについて学びました。

Ⅵ　今後の活動予定

・知的障害特別支援学校高等部卒業生の進路先と定着状況についての調査を行います。

・令和6年2月8日に障害当事者を招き「企業で働き続けるために必要なこと」等について第3回研修を行います。

・令和6年度も、3回の研修会と連携研修（2回）を行う予定です。連携研修では、大学教授や障害者の労働生活を支えている企業の責任者や障害当事者を講師にお招きして研修を実施する予定です。

＜令和5年度連絡先＞

団体名		東京都知的障害特別支援学校就業促進研究協議会
代表者	所属	東京都立青鳥特別支援学校
	職　氏名	統括校長　諏訪　肇
	連絡先	03－3424－2525
事務局	所属	東京都立青鳥特別支援学校
	職　氏名	主任教諭　神立　佳明
	連絡先	03－3424－2525

研究主題　喫緊の教育課題に対する実践的な教育内容・方法について

～ 喫緊の教育課題及び実践例について理解を深め各学校における学校経営に生かす ～

Ⅰ　団体の概要

東京都知的障害特別支援学校長会主催研修会は、東京都立特別支援学校(知的障害)の校長４５名で構成されている。毎月行われている校長連絡会と同日に研修会を開催し、喫緊の教育課題について共通理解を図っている。併せて喫緊の教育課題に対する各校の先進的な実践事例について情報交換を行い各校における学校経営に生かしている。

Ⅱ　研修の目的

学校を取り巻く環境は急激に変化し、喫緊の教育課題が山積している。課題解決を図るため、管理職のリーダーシップの下、各学校において、課題を共通理解し、具体的な対応策を検討して組織的・機動的に実施していくことが求められている。

本団体では、喫緊の教育課題を学校間で共有するとともに、教育課題に対して先進的な取り組みを行っている学校が具体な実践内容・方法を紹介し、本会員が、その事例を参考に各学校の教育活動の充実に図ることを目的としている。

Ⅲ　研修の方法

東京都の研究指定を受けている学校を中心に、毎月１校から２校が具体的な課題と課題解決に向けた取り組みを本研修会で報告する。全体会で、質疑応答をして理解を深める。その後、学校に設置されている学部ごとに３班に分かれて、報告内容に基づきさらに深めた情報交換を行い、その内容を各学校の学校経営に生かしている。

Ⅳ　研修内容

実践報告（実践報告・情報交換・実践研修・還元研修）

回	実施日	テーマ
1	６月６日（火）	・知的障害教育における教育課程の充実 ・知的障害の状況や程度に応じた指導の在り方の研究 ・ＣＳＶ（センター的機能スーパーバイザー）の事業
2	７月４日（火）	・特別支援学校における知的障害のある子供への性教育
3	８月２３日(水)	・難しくなる保護者との対応トラブルを考える
4	10 月３日（火）	・練馬特別支援学校の職能開発課の開設 ・南多摩地区特別支援学校の開設 ・児童生徒の自殺予防に関する普及啓発
5	11 月７日（火）	・知的障害の程度の重い児童・生徒のデジタル活用
6	12 月５日（火）	・デジタル教材の開発
7	２月 13 日（火）	・芸術系大学等と連携した芸術教育の推進事業
8	３月５日（火）	・年間のまとめ

Ⅴ　研修事例

1　特別支援学校の管理職としての保護者対応について

令和５年８月２３日（水）に内外教育の連載を始め多くの執筆、講演会等で御活躍をされている、小野田 正利 氏 大阪大学名誉教授を講師としてお招きし、難しくなってきている保護者との対応トラブルについて御講演をいただいた。

保護者対応トラブルを「生きづらさや葛藤を抱えている保護者への対応」「違法行為・不当要求への対応」「問題が別に起因している場合への対応」の大きく三つに分けて、推測される背景要因と対応ポイントについて、具体的な事例を基に御教授いただいた。

2　知的障害の程度の重い児童・生徒のデジタル活用について

東京都特別支援教育推進計画（第二期）第二次実施計画に基づいた「知的障害の程度の重い児童・生徒のデジタル活用事業」の指定校である、調布特別支援学校の原田 勝校長から御講演をいただいた。知的障害の程度が重い児童・生徒の知的発達の状態に応じたアプリケーション等を活用した指導内容・方法の研究・開発の状況について、具体的な説明をいただいた。情報に精通した人材の育成・確保やデジタルサポーターの活用方法、外部専門家の確保・活用、効果的、計画的な予算計画等、多岐にわたり御教授いただいた。

Ⅵ　研修の成果と課題

東京都の研究指定を受けている学校の取り組みを中心に報告を行ったことで、先進的な取り組みをいち早く共有することができた。また、情報共有を進めていく中で、各学校の取組や課題を知り、自身の学校経営を振り返り、紹介された実践を自分の所属する学校に取り入れ、方針や考え方を学校経営に生かすなど、専門性の向上、学校の教育力の向上に役立てることができた。

校長連絡会の後の開催ということで、開催時間も限られており、実践報告に対する質疑応答を行い、情報共有を深めたり、各班に分かれて情報共有を深めたりする等の時間を十分に確保することができなかった。

夏期休業中に講師を招聘し実施した「保護者との対応トラブルを考える」をテーマとした実践研究会は非常に有意義であった。

今後も変化の激しい昨今において、適時な教育課題を取り上げ、知的障害特別支援学校の教育の充実・発展のための研修に取組む。

＜令和5年度連絡先＞

団体名		東京都知的障害特別支援学校長会主催研修会	
代表者	所属	東京都立羽村特別支援学校	
	職　氏名	校長　外山　裕介	
	連絡先	０４２－５５４－０８２９	
事務局	所属	東京都立清瀬特別支援学校	
	職　氏名	校長　古舘　秀樹	
	連絡先	０４２－４９４－０５１１	
団体ホームページ		ＵＲＬ	二次元コード
		―	―

研究主題　共につくる特別支援教育 ～コーディネーターの仕事術～

Ⅰ　団体の概要

本研究会は平成１６年に発足し、初めは「特別支援教育って何だろう？」と困惑からのスタートだったが、そこからコツコ実践を積み重ねてきた。

特別支援教育に携わる様々な学校関係の方が集まって、現場での実感を分かち合い、子供の目線に立ちながら、指導と連携の具体策を話し合い、明日の実践への活力を生む。そんな研究会を目指している。

Ⅱ　今年度の研究

多くの先生たちとの関わり合い、支え合いの中で進められていく特別支援教育。その中心となるコーディネーターに焦点を当て、４回のセミナー（研修会）を実施した。

毎回テーマを決め、運営委員による実践報告や参加者とのグループ協議を通して、児童・生徒等への具体的な指導・支援の手だてや連携の方法を探った。

５月	春のセミナー	仕事の見通し、校内委員会など
８月	夏の一日セミナー	保護者との連携、ケース会議など
11月	秋のセミナー	発達検査、学校生活支援シートなど
１月	冬のセミナー	１年間のまとめ、引継ぎ、新年度準備

Ⅲ　セミナーの実施報告

（１）　春のセミナー

【仕事の見通し】

・コーディネーターの役割とは？

① 校内の関係者や関係機関との連絡調整

② 保護者に対する相談窓口

③ 担任への支援

④ 巡回相談や専門家チームとの連携

⑤ 校内委員会での推進役

・まずは、自分の中でチームを作る。

・そして、関係機関の一覧や手続き集を作る。

【校内委員会】

・校内委員会とは、特別支援教育を組織的に取り組むための中核となる会議

・スムーズな運営のためのポイントは？

① 対象となる子供の一覧表作り、確認

② 次第作り、打ち合わせ

③ 終了後の校内での情報共有、支援の明確化

【校内での連携】

・指導、支援の中心は担任である。担任の負担感に寄り添う言葉掛けをきっかけにするとよい。

・コーディネーターが率先して援助要求を行う。

（２）　夏の一日セミナー

〔講義・演習〕

演題「ホワイトボード・ミーティング®がつなぐ特別支援教育」

講師　田中雅子先生

（北海道教育大学釧路校准教授・ホワイトボード・ミーティング®認定講師）

【保護者との連携】

・子供本人の思いを確認する。

・「協力します」「味方です」というスタンスで、まずは保護者の話を丁寧に聞く。

・巡回指導教員、担任など、それぞれの立場からの情報をバランスよく集め、一人で抱えず、チームとして協力していく。

【ケース会議】

・「話せてよかった」と思えるように、情報共有で終わらずゴールを明確にする。

・普段から、風通しの良い人間関係を心掛ける。

・記録を可視化する。

（３）　秋のセミナー

【発達検査】

・代表的な検査「WISC-Ⅳ」「WISC-Ⅴ」

・４つ（Ⅴは５つ）の指標得点と得点を総合した全検査ＩＱが分かる。これらを基に具体的な支援を考えていく。

【学校生活支援シート・個別指導計画】

・２つの違いが分かりますか？

「学校生活支援シート」は、本人や保護者の希望を踏まえ、　教育、保健・医療、福祉等が連携して、児童・生徒を支援していく長期計画。

「個別指導計画」は、学校の指導・支援の中でも学習に関する支援を具体化した長期及び短期の指導計画。学校生活支援シートを踏まえて作成する。

Ⅳ　参加者の声

○立場や環境が異なる人同士が集まっていても、それぞれの話をじっくり聞いて、強みやできることを見付けていく中で、共に学び合うことができるということに喜びを感じました。

○自分の思いを可視化、言語化することの大切さを改めて感じました。最後まで聞き続けることが大事だとも感じました。

○分かっているようで分かっていなかった発達検査のこと、学校生活支援シートや個別指導計画のことなど、整理して理解することができました。お話がとても分かりやすく、参考になりました。

○研修会でたくさんの迷いや悩みが解消されました。多くの先生方と意見交流をできたことで、安心感が得られました。

○グループ協議では、多くの先生方と意見交流できたことが、多くの学びにつながりました。学んだことを、これからの指導に活かしていきます。今後も、ぜひ研修会に参加したいです。

＜令和5年度連絡先＞

団体名		東京コーディネーター研究会	
代表者	所属	町田市立鶴川第一小学校	
	職　氏名	校長　小林　繁	
	連絡先	０４２－７３５－１２３４	
事務局	所属	豊島区立池袋第一小学校	
	職　氏名	主幹教諭　吉成　千夏	
	連絡先	０３－３９１６－３４３５	
団体ホームページ		ＵＲＬ	二次元コード
		https://tckenkyu.com	

研究主題　知的障害がある生徒の体力・運動能力と健康意識に関する研究
～ベースボール型競技の普及に向けた実践と課題①～

Ⅰ　団体の概要及び研究の背景

東京都知的障害特別支援学校・特別支援学級設置学校を対象に、体育・保健体育に関する研究の推進と共に、各種競技の普及、スポーツを通じた交流機会の企画・振興を図ることを目的とした団体である。団体発足の直接の契機は、昭和 34 年の第 1 回特殊学級球技大会（参加校…青鳥養護学校、荒川一中他 10 学級程度）である。以後、現団体名に至るまでに、運営方法や団体名が変わりつつも「知的障害のある児童生徒にも、多くの運動・スポーツの機会を」という発足当時の願いを引き継ぎ、知的障害のある子どもにとって分かりやすいルールや運営方法について研究を重ねてきた。現在では、陸上競技、キックベースボール、ソフト・ティーボール、バスケットボール、サッカー、バレーボールの各種大会や指導者講習会等、年間を通じて主催している。

令和 4 年度からは、保健体育授業、運動部活動の指導、各種競技大会の充実に向けて、体力・運動能力等の実態把握、体育・スポーツ、健康に関する本人意識についてのアンケート調査等、基礎的調査も実施し、知的障害のある児童生徒の実態の見直しを図っている。

本連盟が昨年度実施した知的障害特別支援学校高等部の生徒を対象とした保健体育授業への意識に関する調査によると、保健体育の授業について肯定的な回答（「好き」、「どちらかと言えば好き」）が約 8 割であった（図１）。一方、体力・運動能力の結果は、男子ハンドボール投げを筆頭に、健常の高校生と比較するとその差は著しい（図２）。

また、団体が主催するソフト・ティーボールの大会についても、近年参加校数が２校にまで減少し、大会の開催が困難で講習会という形式でという運営している現状がある。

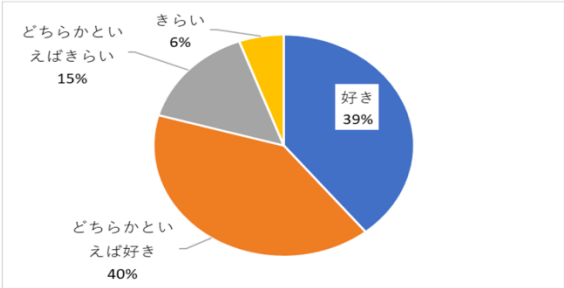


図１．体育授業の好嫌(n=1064)

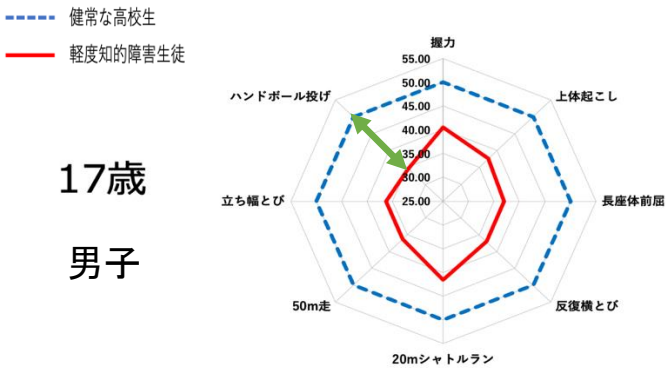


図2．Ｔスコアによる健常な高校生（スポーツ庁，2022）との比較

Ⅱ　研究の目的

本研究では、以下の２点について明らかにし、今後の会運営、特別支援学校・支援学級での指導の方向性を見出すことを目的とする。

ⅰ．ソフト・ティーボール講習会参加者の満足度の把握

ⅱ．指導及び会運営に関わる教員の意識

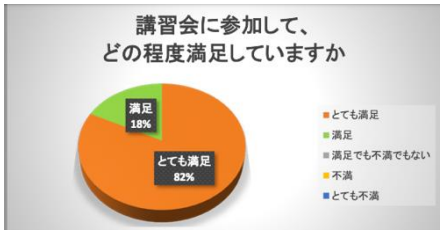
Ⅲ　研究方法

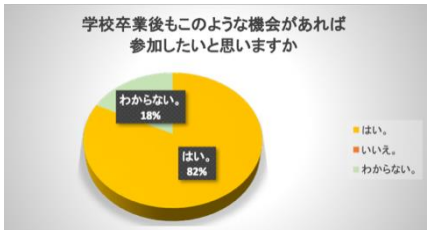
ⅰについては、調布基地跡地飛行場で実施されたソフトボール講習会（9/6）に参加した高等部生徒 17 名に、満足度等に関するアンケートを実施した。

ⅱについては、講習会終了後、事前に会運営と日頃の指導に関して聞き取り項目を伝えておき、ソフト・ティーボール部会議（10/17）で意見交換を行い、内容を分類して整理した。

Ⅵ　結果

ⅰ．　参加者（高等部生徒）の満足度と卒業後の運動継続の意欲





ⅱ．指導及び会運営に関わる教員の主な回答

主な意見	現状	改善策
・参加のあり方	・各校ごと	・連合、個人参加の容認
・開催時期	・９月前半は酷暑	・９月後半も視野に
・ティーボール積極的導入	・用具活用率が低い	・当団体による指導方法の発信

Ⅴ　今後の課題と展望

〇参加者（当事者）の意識に即した大会運営

参加者全員が「満足」以上の回答をしていた。今回の講習会では、日本女子体育大学ソフトボール部の現役選手等からのコーチングと交流がプログラムに反映されたことも満足度を高めた要因であると考えられる。卒業後も機会があれば参加したいと８割が回答していることから、何らかの形で卒業生の参画を検討する必要も考えられる。

また、指導及び運営に関わる教員からの回答にあるように、練習方法や場所の問題はあるが、ニーズに応じて、合同チームや個人での参加も模索していく必要があると考えられる。

〇各学校での指導の取組とその方向性

生徒の投動作の向上、当団体が主催する大会参加校を増やすことに関連する事として、授業や部活動でティーボールの活用を増やし、障害の程度が中重度の生徒でも、ベースボール型競技への興味や関心が高まるような土台づくりが必要。この点については、引き続きの課題としつつ、次年度以降は実践事例等を紹介していきたい。

＜令和5年度連絡先＞

団体名		東京都特別支援学校・特別支援学級設置学校体育連盟
代表者	所属	東京都立王子特別支援学校
	職　氏名	校長　久保井　礼
	連絡先	０３－３９０９－８７７７
事務局（研究）	所属	東京都立練馬特別支援学校
	職　氏名	指導教諭　石川　敦士
	連絡先	０３－５３９３－３５２４

研究主題　「東京都立特別支援学校における言語活動の基礎となる読書活動の充実」
～学校図書館の活用を学びの中心に～

１　団体の概要

「子どもの読書活動の推進に関する法律」に基づき、子供の読書活動の推進に関する施策の方向性や取組を示す「第四次東京都子供読書活動推進計画」が、令和３年３月に策定されました。

本研究会は、障害のある児童・生徒にとっての「読書習慣の形成」、「学習の基盤となる資質・能力の育成のための読書活動の推進」、「読書環境整備の推進」、「読書の質の向上」の観点から、特別支援学校における読書活動の在り方を研究・推進していくことをねらい、東京都教育委員会研究推進団体設置要項に基づく東京都教育委員会研究推進団体（令和３年３月２日決定）として設立しました。

２　研究の目的

本研究会は発足以来、指導部特別支援教育指導課の助言・援助を頂きながら、会員・非会員校の区別なく全ての都立特別支援学校等が参加可能な公開型の研究協議会を定例で開催しています。

国や都の最新の動向、関連する諸計画等の理解に基づく各学校の読書活動の取組紹介や情報交換を通して、特別支援学校における言語活動の基礎となる読書活動の充実に向けた学び合いの場としています。

３　研究の方法

言語活動及び読書活動の充実に関して都教育委員会の指定を受けた推進校の取組経過報告の機会（期末の成果報告に向けたリハーサル機会の提供）及び他校の効果的な工夫や推進を効率的に共有する機会（推進事業へのアイデアの提供）として、年に２回、長期休業中に協議会を開催しています。

読書活動に精力的に取り組んでいる学校を会場とし、❶会場校の読書環境整備状況の視察、❷指導部統括指導主事による特別支援学校における最新の読書活動推進状況等の講演、❸推進校の活動紹介、❹情報交換等、読書活動を活発化させるための具体的取組や、読書活動の充実による児童・生徒の思考力・判断力・表現力の向上につながる実践の共有を図っています。

また、都教育委員会の新規事業「都立特別支援学校図書館管理システムの導入」を推進するための学校間での情報共有・共通理解の場としての機能も担っています。

【令和５年度　第５回研究協議会】
指導部特別支援教育指導課
平澤庄吾統括指導主事による
講話

４　研究の内容・実践紹介

①先進校の読書環境整備の状況を見学し、レイアウトや配架方法の工夫について知り、自校の読書環境整備に生かす。

②事前に各校の状況を一元化したシートを活用し、少人数による情報交換で好事例を共有することで、各校での課題解決に生かす。

毎回、受講者レポートからは「多くの学校の展開の工夫や制約条件の突破策に大いに触発された。自校で活用したい。」といった声が多数寄せられています。

第４回研究協議会　令和４年１２月　会場：都立永福学園
第５回研究協議会　令和５年　７月　会場：都立府中けやきの森学園

５　成果と課題

≪成果≫

〇読書活動の意義を理解することで、カリキュラム・マネジメントの視点で効果的な組織運営の手法等、読書活動を牽引するミドルリーダーを育成することができた。

〇「都立特別支援学校図書館管理システムの導入」に伴う「都立特別支援学校における図書の学校間貸借開始事業」等、新規施策に対する学校間での情報共有や課題解決につながる情報提供を受ける機会を担った。

≪課題≫

△図書館環境整備（ハード面）にとどまらず、カリキュラム・マネジメントを通した読書活動の充実による児童・生徒の思考力・判断力・表現力の向上（ソフト面）につながる教育実践を増やす。

△年２回の研究協議会でのミドルリーダー間の繋がりを活用した、デジタルツールを活用した情報交換の機会増加システムを構築する。

＜連絡先＞

団体名		東京都特別支援学校読書活動研究会
代表者	所属	東京都立墨東特別支援学校
	職　氏名	校長　田村　康二朗
	電話番号	03-3634-8431
事務局	所属	東京都立墨東特別支援学校
	職　氏名	主幹教諭　高澤　昇太郎
	電話番号	03-3634-8431

研究主題　障害のある子供たちへ性教育を進めるために
～東京都特別支援教育性教育研究会の再出発～

Ⅰ　団体の目的

特別支援学校、特別支援学級等における性教育の在り方について、学習指導要領に基づき追究し、実践研究を積み重ねることを目的とする。

Ⅱ　団体の概要

東京都において、性教育に関する研究組織として、小学校、中学校、高等学校には性教育研究会があり、活動を継続しているが、特別支援教育における特別支援学校に関しては休会状態で、長年の課題となっていた。

昨今、特別な支援を必要とする児童・生徒の性教育の必要性と充実が求められている実情を踏まえ、令和５年度より東京都教育委員会研究推進団体の認定を受け、計画的に活動を進めることとした。

令和５年５月２０日（土）　第１回研究協議会の様子
国立オリンピック記念青少年総合センター　国際交流棟で実施

Ⅲ　研究の内容

（１）障害のある児童・生徒の性教育、性に関する指導について、研究・研修を進める。

（２）東京都教育委員会研究推進団体として、研究の成果を広く都内学校に普及する。

（３）学習指導要領に基づき、「性教育の手引き」（平成 31 年３月　東京都教育委員会）を参考に、公立学校における性教育の在り方を追究する。

（４）児童・生徒の実態、保護者のニーズを踏まえ、実践的な対応について研究し、周囲の人々の正しい理解と支援を促し、障害のある児童・生徒の社会参加と自立に資する研究を進める。

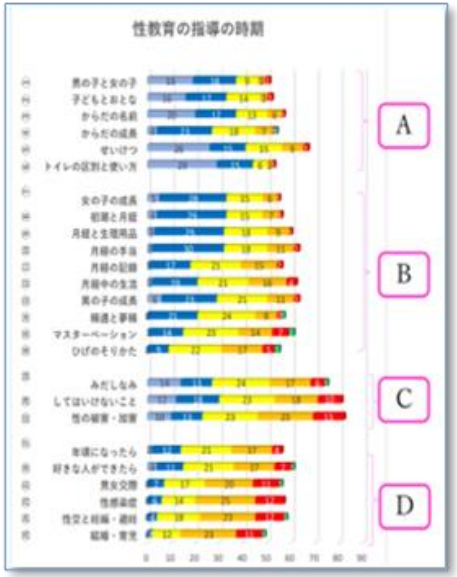
（５）東京都性教育研究会に加盟し、東京都小学校性教育研究会、東京都中学校性教育研究会、東京都高等学校性教育研究会と連携し、性に関する指導の研究と成果普及に努める。

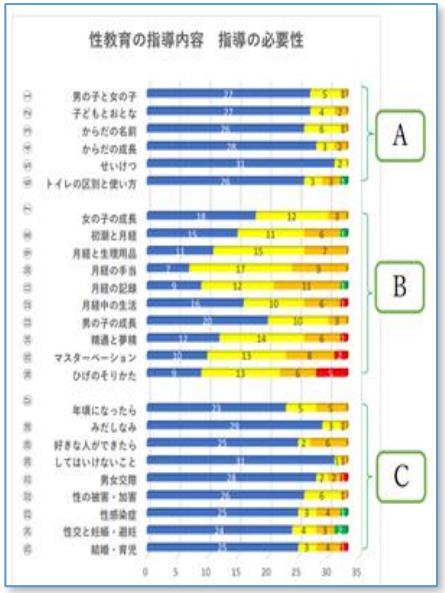
Ⅳ　先行事例に学ぶ（１）

東京学芸大学附属特別支援学校　蓮香美園先生より「東京学芸大学・障害児性教育ガイドブック開発研究会」20 項目の指導案・教材・評価用ワークシート３点の内容、活用例について情報提供していただいた。特別な支援を必要とする児童・生徒へのレディネスを見極め、必要な学習の展開を考える機会となった。

Ⅴ　先行事例に学ぶ（２）

東京都心身障害者福祉センター山本良典先生より「障害のある子の性と支援」（子どもたちがすてき大人になるために）のテーマで御講演いただいた。山本先生から、性教育の内容と目標 25 項目について示していただき、今後の研究活動に反映させるため、本研究会の参加者へ「性教育の内容に関する意向調査」を行った。特別支援教育における性教育の現状と課題について把握することができた。以下、調査の一部を紹介する。





	必要性がある	必要性がある（男女別に）	必要なときに個別に	学校で指導する必要はない	分からない
Aの項目	84%	12%	5%		
Bの項目	38%	38%	20%	3%	1%
Cの項目	79%	10%	9%	1%	1%
全体（25項目）	64%	22%	12%	1%	0.7%

【性教育の内容に関する意向調査①】

性教育　指導の必要性について

	小学校（小学部）低学年	小学校（小学部）高学年	中学校（中学部）	高校（高等部）	卒業後	その他
Aの項目	34%	32%	23%	9%	3%	
Bの項目	5%	36%	34%	19%	5%	0.9%
Cの項目	15%	18%	29%	24%	12%	0.4%
Dの項目	2%	13%	31%	37%	17%	0.6%
全体（25項目）	13%	27%	30%	22%	8%	0.6%

【性教育の内容に関する意向調査②】

性教育　指導の時期について

Ⅵ　今後の活動について

平成 31 年３月に東京都教育委員会から出された「性教育の手引き」の内容を踏まえて、更に具体化した「年間指導計画」の作成につながるよう提案していく。また、性教育を推進する委員会を校内に設置するなど東京都教育委員会や校長会に提言することを進めていく。今後も特別な支援が必要な児童・生徒の性教育を推進していくために特別支援学校、特別支援学級における実践を積み重ねて、語り合える場を拡充していきたい。

Ⅶ　第６回研究協議会（研究成果報告会）について

日　時　令和６年１月 13 日（土）14 時 00 分～16 時 00 分

場　所　教職員研修センター111 研修室（定員 150 名）

内　容　（１）成果報告

（２）東京都教育委員会から指導・助言

（３）記念講演「対人関係をよくするために」

講師　東京都心身障害者福祉センター　山本　良典　先生

＜令和5年度連絡先＞

団体名		東京都特別支援教育性教育研究会	
代表者	所属	東京都墨田特別支援学校	
	職　氏名	校長　朝日　滋也	
	連絡先	03-3619-4851	
事務局	所属	東京都立志村学園	
	職　氏名	主幹教諭　橋爪　淳	
	連絡先	03-3931-2323	
団体ホームページ		ＵＲＬ	二次元コード
		東京都性教育研究会ＨＰに掲載 https://toseiken-office.com/	